

源雅行 年譜

川 上 健 太

はじめに

源雅行という人物については、一般にはほとんど知られていないと思われる。辛うじて知られているとすれば、藤原定家との関連であろう。文治元年（一一八五）十一月二十五日、定家は源雅行から詠歌を酷評されたことに立腹し、彼を殴打した。この事件により、定家は公卿除籍の憂き目にあうこととなる。しかし、定家の父俊成が、

今上の御時五節のほど、侍従定家誤ちあるさまに聞しめすことありて殿上除かれて侍りける、その年も暮れにける又の年の弥生の一日頃、院に御気色給はるべき由左少弁定長がも

とに申し侍りけるにそへて侍りける

入道皇太后宮大夫俊成

あしたづの雲路まよひし年暮れて霞をさへやへだてはつべき

の一首を藤原定長に贈り、それを見た後鳥羽天皇によって定家は許されたという。歌の力を示す逸話として『千載和歌集』『古今著聞集』『十訓抄』などに載る話であるが、この話の主役は定家・俊成であり、雅行はそれを引き立てる脇役となっている。

しかし一方、源雅行は平安末期から鎌倉時代にかけての公卿であり、彼の一生をたどることは、当時の公卿の生活の標準的規範となり得る。藤原定家の詠歌を酷評したということは、彼にも相応の和歌への知見があったと見るべきであろう。

一方の定家も『明月記』の中で度々彼のことを取り上げている。雅行はしばしば宮中の行事を務めていたものの、その場での失態が目立ったらしい。それは、「雅行朝臣不取松明事」(『明月記』元久元年一月十二日条)、「雅行逐電勤劔璽役事」(『明月記』元久二年十二月十九日条)などの記事によく示されている。源雅行が儀礼において過失を犯したことは興味深く、それが定家による有職故実の知識を披瀝する機会ともなったのである。当時としては平凡に見える、この人物に注目することにより、『明月記』および有職故実研究の一助となることを考え、以下にその年譜を作成して掲げるものである。

源雅行 正二位大納言源定房・正二位中納言藤原家成女の長男

仁安三年

(一一六八)

安元元年八月十七日

(一一七五)

誕生〔公家事典〕

藤原光雅が、御賀の童舞を勤めるよう父に指示を伝える。中山忠親曰く「舞の名前は言わずに、ただ童舞を用意するよう源定房・中御門宗家に伝達した。ただし、陵王は中納言の息子というのは、康和御賀で陵王を舞った中納言宗家の祖父中御門宗忠の息子宗重は、刺客のため殺害された人だ。父によっては吉例だが、息子にとっては不吉である。人々が舞える子供を尋ねた時、宗家は子供を隠していないと言っていた。先例では、童舞の人は太政大臣久我雅実・右大臣中院雅定であるが、これはすべて胡飲酒である。これは吉例である。そのほかは、康和の宗重と閑院季輔（納曾利）、仁平の藤原定家と源雅仲は不吉である。そこで、人々はこれを隠したのだろう。行事を進めるに当たってそんなことは無益である。宗家は先に辞退し、「我が子は顔が不細工である。実際に見て見よ。」と言っていた。法皇陛下は、「大変おもしろいことを言う。」とおっしゃったという。大納言定房の子供は、今は胡飲酒を習っていないという。光雅は理由を知ろうとして、御教書（院宣か綸旨）の懸紙に、「陵王は中御門中納言の息子がする。舞の名前は言わないが、納蘇利を舞うと思ってください。」と書いて定房に渡した。しかし、定房は胡飲酒を舞いますと請文を献上し

安元元年九月十三日

安元二年二月二十一日

(一一七六)

た。光雅はこのことを院に報告した。法皇陛下は、「大納言の家は代々胡飲酒を舞ってきた。だから大納言の考えも理由がないこともない。胡飲酒は今回見たいと思っている。何か問題があるのか。」とおっしゃった。康和・仁平には定房の父雅兼が勅禄を取って胡飲酒を舞ったので、今回胡飲酒を舞っても珍しくはない。どうだろうか。陛下があきらめられるか、または大納言定房が承諾するか、どうか。胡飲酒の童舞については、舞の名前は伝えないが、胡飲酒を舞うのだと考えるのが適切だろう。〔源大納言定房、子、八歳〕〔山槐記〕

宗国とともに童舞を勤めるよう、先月十七日指示がある。忠親曰く「大納言の息子には、童師多忠節の息子景節が付くという。」「大納言定房卿子」〔山槐記〕

安元御賀試楽で一鼓童を勤める。藤原光雅が長橋南妻より中門廊・納言座の末を経て、閑白座の下を進み、報告した後還って定房の座の前に跪き、楽について話し合う。九条兼実曰く「何かは知らない。もしや胡飲酒のことか。」。閑院第庭中にて舞を舞う。早く楽屋に入ったため、右の舞人・左右の楽人らは列立しなかった。行列で先頭をととめる（九歳。装束はいつも通り。天冠・総角を垂らし、首に鼓をかける）。古鳥蘇の後、日が傾いたとして、松殿基房の指示で胡飲酒を舞うことになる。徳大寺実宗の指示で、定房が小板敷より降りて杵を著して仙華門代より入り、前庭より楽屋に向かう。装束（蓋舊貫）補助のため父が、母の兄弟四条隆季と大宮成親、父の弟壬生雅頼を引き連れて楽屋に入ってくる。装束を著するため西中門西廊宮御方侍所へ行く。一時の後、蔵人の再三の催促により楽屋

安元二年三月四日

にやってきて大鼓（遠江守季能）・鉦鼓（侍従家俊・少納言信季）とともに楽屋の北第二間より庭中へでて、父の補助で胡飲酒（序一遍・破五切）舞う。九条兼実曰く「その曲は絶妙で、見る者は称美した。」破五遍舞い帰ろうとしたとき、基房に笏をもって呼ばれるが気づかなかつたため、実宗がやってきて指示する。中門廊南妻より昇り（靴を脱がなかった。雅頼が殿上よりやってきてこれを補助する。）、中門廊・納言座の末から長押に上り、廣底西よりひざまずいて進む。御座東間簾下の関白より目配せを受けて進んで跪き、紅打御柏の御衣を左肩に掛けてもらう。兼実曰く「他の舞では左肩にかけるが、胡飲酒では右肩にかけるという故実である。これは、左手に撥を持っているためである。陛下が着ている服を脱いで、執柄松殿基房がやってきてこれを脱がす。今日は簾中より出された。大変その理に背いている。しかし仁平二年の御賀後宴ではこのようになっていたという。」御衣を肩にかけながら、同じ庇で一曲奏して、納言座の後ろにて父に御衣を渡す。長橋のあたりに降り立ち、本路より帰る。父が入綾を舞っている間、前庭を通り楽屋に入り、御前庭にて舞い指す。大炊御門経宗曰く、「舞い始めのところが仁平の例と違う。大変不審である。」答舞はなかった。装束は、赤色浮文織物の闕腋袍・黒半臂・通常の下襲・白縮線の綾表の袴、天冠は総角を垂らし異形はなし。糸鞋はいつも通りで、袍打掛・二重織物表袴・靴は先例の通り。「小舎人源雅行・童・幼童・舞童・胡飲酒」〔玉葉〕

後白河法皇五十御賀で、行事参議実家と実守が楽行事前の東西座の上頭に著すと、しばらく鼓でもって舞い、左鼓鉦の北を通り楽屋に入る。行列で先頭をつとめる（天冠・装束は

安元二年三月六日

試楽の時の通り。ただし、表袴は二倍織物で赤地錦足続があつた。銀文を打ちこれをつける。今日院の昇殿を許可された。名簿には「蔭孫源雅行」と書かれる。」胡飲酒を舞う予定だったが、議定により康和の例にならない中止となり、陵王になる。兼実曰く「康和の例は、かの童が所労によって出仕せず、たちまちに陵王に変更した。今日は、胡飲酒の童はすでに出仕している。納蘇利を舞うべきとのことだ。胡飲酒は何で中止したのか。康和の例にならっているようだが、かえってかの例に背いていると言うべきだろうか。」納蘇利を舞う（装束は上からいただく。その舞は優美であつた）「玉葉」。一の鼓の童となり、賀王恩の時、おほのたゞときを随えて御前の庭を渡る。各々楽屋に入る中、庭にとどまって袖をひるがえす。舞が奏されると、小松のにしのもとにてこまかなで（高麗楽か）をする（一のつら・一のつづみ等異文あり）〔安元御賀記〕

安元御賀後宴で、高倉天皇が笛を吹いていると、船を下りて列の先頭となり舞人・楽人とともに楽屋に向かう。庭中にて舞童（宗国か）とともに一鼓を懸けて舞う。舞人らは太鼓の前にいたが、一の鼓の童が早く楽屋に入ったため、楽人らは列立せずに楽屋に入る。古鳥蘓が終わると、胡飲酒の補助のため父と雅頼が楽屋にやってくる。青海波の後、楽屋の北第二間を経て、大鼓と下鉦鼓の間より出てきて、父の補助で胡飲酒序二反・破二反を舞う。隆房曰く「その舞は大変すばらしく、見るものは涙を流した。」。答なく楽屋に帰った後、光能が祿として、素袍の綾の桂を取る。その後、肩にかけて入綾を舞う。兼実曰く「今日は御衣をいただかなかった。試楽の日に勅祿に預かった者は、重ねてこのことはな

治承元年十月二十七日

(一一七七)

治承三年一月十九日

(一一七九)

治承三年十一月十三日

治承四年八月十五日

(一一八〇)

養和元年一月五日

(一一八一)

寿永元年三月九日

(一一八二)

寿永元年六月十五日

寿永元年十月二十六日

いとのことだ。」龍王の後納頼利を舞うが、胡飲酒で禄をいただいたため禄をもらわなかった。陵王の後、落蹲を舞う。隆房曰く「入綾こそが目にも美しかったろうか。」「一童・両舞童共・胡飲酒のわらハ」〔玉葉〕〔安元御賀記〕

叙位〔公卿補任〕

侍従〔公卿補任〕〔玉葉〕〔山槐記〕

童女御覧に出席し、童女らが廣西第二間東の辺り以西にみると、少将公守とともに菩提院実守の童に付く〔玉葉〕

放生会で、車に乗り扈從する〔山槐記〕

従五位上（父の平野大原野行幸行事賞の譲）〔公卿補任〕

右近衛少将〔公卿補任〕

大内よりの還宮で、藏人少輔親経とともに内侍所にて扈從する〔吉記〕

夜に九条良通邸にやってきて、春日使の陪從の装束について会談し、「調え送る。」と言われる〔玉葉〕

寿永元年十一月四日

良通の所より、春日祭使陪従の装束六具を送られる〔玉葉〕

寿永二年一月二十二日

備後介兼務〔公卿補任〕

(一一八三)

寿永二年四月九日

正五位下〔公卿補任〕

寿永三年三月三日

平等院一切経会で、滋野井公時とともに楽行事をつとめる〔玉葉〕

(一一八四)

元暦元年七月二十八日

後鳥羽天皇の即位式で、天皇が御輿に乗ると、宗長・忠季とともに東西階下の格子をあげて退出する。右（左か）近衛中将唐橋通資・左近衛（権か）中将滋野井公時・左近衛少将

(一一八四)

三条定輔・左近衛少将中山兼宗・左近衛少将（中将か）公国・右近衛少将難波宗長・右近衛中将岡崎雅賢・左（右か）近衛少将山科実教・右近衛少将六条顕家・右近衛少将閑院実明・右近衛少将徳大寺実保・基範・成定・右近衛（権か）少将坊門伊輔・右近衛少将範能・忠季とともに参入し、公国・成定とともに尻鞘に入れなかった〔山槐記〕

元暦元年八月一日

後鳥羽天皇が大内より閑院に行幸すると、宗長・親雅とともに内侍所の渡御に供奉する

〔山槐記〕

元暦二年三月十四日

良通邸にやってきて、祭料陪従半臂下重を所望する。しかし、軽服でまだ除服していなかった

(一一八五)

ため、「今は憚りがあり、了解できない。」と言われる（今夜兼実・良通・姫君は、陰陽師在宣により除服となる。良通は河原にでて、兼実は門外にて灸治し、姫君は外出する。家の都合が悪いゆえである）〔玉葉〕

元暦二年四月二十日

賀茂祭で近衛使をつとめる〔玉葉〕

文治元年一月六日

従四位下〔公卿補任〕〔吉記〕

(一一八五)

文治元年八月二十七日

法皇が大仏開眼のため宇治にやってくると、武盛とともに河原毛の馬を引き出す〔山槐記〕

文治元年十一月二十五日

豊明節会の御前試の夜に藤原定家を馬鹿にし、濫吹に及んだ末怒った定家により脂燭で殴られる。兼実曰く「顔を殴ったという。」〔玉葉〕

文治二年五月二十七日

最勝講で、実教・公時・成家（成定か）とともに出居にいる〔玉葉〕

(一一八六)

文治二年五月二十八日

最勝講結願で、実教・実明・基範・成定・成家とともに出居に居る〔玉葉〕

文治二年七月二十六日

春季御読経始に出席し、兼実らが列立すると、人数不足により実教とともに出居より呼ばれ参加する〔玉葉〕

文治三年十一月二十四日

賀茂臨時祭で、二献の陪従座の勸盃の瓶子をつとめる〔玉葉〕

(一一八七)

文治四年一月二十一日

丹波介兼務〔公卿補任〕

(一一八八)

文治四年四月二十八日

石清水臨時祭で、宗隆とともに重杯をつとめる〔玉葉〕

文治四年五月十六日

藤原実教が兼実邸にやってきて、「前の八日九日（比叡小五月会か）に陪膳がいなかった。雅行と長経である。院宣によって聞いたものの、返事がなかった。」と語ると、兼実は

文治四年六月五日

文治四年七月十七日

文治四年八月二十日

文治六年一月五日

(一一九〇)

文治六年三月十六日

文治六年四月二十八日

文治六年五月三日

「早く詳しいことを報告して、処分せよ。」と指示する〔玉葉〕

実教が兼実邸にやってきて、「陪膳を無断欠勤したため監禁されていた殿上人雅行と長経が釈放された。」と語る〔玉葉〕

父の死により服解〔公卿補任〕

復任〔公卿補任〕

従四位上〔公卿補任〕

石清水臨時祭で、忠季とともに舞人に重坏を勧める〔玉葉〕

任子立后第二日に出席し、公経・宗隆とともに廣庇座に着す〔玉葉〕

中宮八社奉幣で平野使となるが、遅刻し催促を受ける。吉時の巳刻になってもこなかったため、告文の清書を開くよう兼実が指示する。六社使が列してもこず、幣を伴って本社へ向かうときになってやってくる。兼実が長房より報告を受けると、早く参入して幣を取るよう兼実が指示され、笏を指に挟んで幣を取って立つ。中宮が平野へ向かい押し終わると、兼実が告示した後、幣を返して退下し告文をいただき退下する。兼実曰く「奥に行つてこれを見るのはどうなのだろうか。」〔玉葉〕

童女御覽で、第四として後の童に付く〔玉葉〕

(一一九〇)

建久元年十一月十七日

建久二年二月一日

正四位下〔公卿補任〕

(一一九一)

建久二年三月二十三日

建久二年四月二十六日?

中宮の閑院還御で、信清とともに啓將をつとめる〔玉葉〕
比叡山の衆徒が内裏に押し掛けると、武具をつけず縷を垂らし、帶剣せずによってくる。
定家曰く「何か考えがあつてのことか。」〔次將装束抄〕

建久二年五月二十六日

建久二年十一月二十六日

最勝講初日で、鐘が撞かれた後成定・忠季・隆保・忠行とともに出居にやってくる〔玉葉〕
兼実が初度の復辟をすると、中使として東中門下に立つ。起座し退出した後、良経が前庭にて勅使に拝して舞踏する〔玉葉〕〔都玉記〕

建久二年十一月二十八日

建久三年四月四日

賀茂臨時祭で、宗国とともに重坏をつとめる〔雅親か〕〔玉葉〕
後白河院の三七日仏事で、兼宗・成定とともに冬の衣冠・垂縷を着す〔明月記〕

(一一九二)

建久三年四月二十五日

建久三年四月二十六日

蓮華王院七七御齋会で度者使をつとめ〔師守記〕、少將高通とともに椽を着す〔明月記〕
定家曰く、「ある人が「安元二年の建春門院御齋会で、度者使定能卿は位袍を着し、御誦經使通資卿は椽を着していた」と語った。雅行はその例を踏襲したのだろうか。御誦經使については近衛府の役ではないが、度者は必ず位袍を着すべきという。『中右記』嘉承三年六月十八日条に、「今日殿上の弁官三人が出席した。しかし、左中弁藤原長忠は位袍、権弁藤原為隆、左小弁源雅兼は椽の袍であった。これはどうなのだろうか。特に権弁・左少弁は行事である。治部卿源基綱が申すには、猶行事の弁は位袍を着すべきだろうか。先例ではあるいは位袍、あるいは椽という。このことを調べるべきである。」とある。雅行

建久三年四月三十日

建久三年五月二日

建久四年四月八日

(一一九三)

建久四年五月六日

建久五年一月三十日

(一一九四)

建久五年三月十六日

建久五年四月十七日

建久五年四月十九日

の袍はこのことなのだろうか。」〔明月記〕

八条院御仏事に、保盛・隆信・盛実・成家・定家・為頼・定忠・範光・光親・範経・仲房とともに冠を着して殿上人として出席する〔明月記〕

高倉院七七日講筵で、中山兼宗が「御誦経使については、本府の役ではなのならば、椽を着すべきだ。度者については、必ず位袍を着すべきだ。雅行少将の椽はもっとも不審である。」と定家に語る。殷富門院亮子の高階泰経邸御幸に、隆信・成定・伊輔・顕兼・定家・長俊・隆経・隆雅・保家とともに殿上人として参加する〔明月記〕

内裏の灌佛に出席し、実明の後灌佛するが、急いで進んで灌佛したため、位次によるべきだったが、上位の宗頼が灌仏できなかった。兼実曰く「全く気遣いがない。」〔玉葉〕

右近真手結に、忠行とともに出席する〔玉葉〕

右近衛中将〔公卿補任〕、元第一少将〔山槐記〕

中宮の大原野行啓に、実明・定輔・兼良・兼忠・公継・光雅・忠経・実教・通資・兼光・隆房・親宗・経房・隆忠・家房・良経・忠季・宗頼・長房・長兼・仲資王とともに参加する〔仲資王記〕

賀茂詣に出席し、公卿が着座した後忠季とともに着座する。兼実が賀茂上社に行くと、杏を取る〔玉葉〕

良経の息子（道家か）が養育のため兼実邸に引越すと、親能・忠季・高通・資家とともに

に共をする〔玉葉〕

建久五年八月（四月か）

九条良輔の元服で、理髪をつとめる〔皇代曆〕

建久五年十一月二十三日

押小路殿への御方違行幸で、出御があると西園寺公経とともに内侍に付く。右近衛少将持明院保家・右近衛少将岡崎有雅・左近衛少将大炊御門師経とともに列立し、左近衛中将河原公国とともに御座を見る〔明月記〕

建久五年十二月四日

御堂御八講に、良経・兼実・伊輔・定家・高通・家綱・頼房とともにやってくる〔明月記〕

建久五年十二月十六日

内侍所御神楽で、無能をつとめる〔明月記〕

建久五年十二月十九日

内裏御仏名で、小庭を経ずに青瑣門を昇り先に着す。公卿が着座すると名謁を行う。高階泰通が後からやってきて幔下に跪き出居方をみると、再び名謁を行う〔明月記〕

建久六年二月二日

尾張介兼務〔公卿補任〕

（一一九五）

建久六年七月八日

如法佛眼法結願で、阿闍梨の絹褰を取る〔三長記〕

建久六年八月十五日

昇子内親王の三夜で、公卿が着座した後、公房・親能・成定・伊輔とともに殿上人の座に着座する。祐能（親能か）・成定・伊輔・定国・定家とともに役送をつとめる。殿上人の座より呼ばれ、中門廊東を経て中門外より御前物を取る。親能・成定・伊輔とともに南簀子に昇り立ち、屯食案が南庭にのぼせられると成実とともに御衣筥を昇す。〔三長記〕

建久六年八月十九日

昇子内親王の七夜で八条院御使をつとめ、中門外に立った後長兼より申し上げられると、公卿の座の前廣廂第二間の御使の座に進み座る。御衣が中門廊にのぼせられると、白綾掛・

建久六年八月二十一日

建久六年十月七日

建久六年十月十三日

建久六年十月二十日

建久六年十月二十三日

建久六年十月三十日

建久六年十一月十日

濃袴を長兼よりいただき、禄を肩に担いで南庭にて二拝する。為□（説か）・業清・伊輔とともに殷富門院よりの御衣を昇す〔三長記〕

昇子内親王第九日で、親能・成定・伊輔・宗国・定家・高□・実宣とともに役送をつとめる〔三長記〕

昇子内親王五十日で、経仲・成家・定経・定家・高通・宗隆とともに役送をつとめ、各々笏を挿み御台を取り雁行して進む〔三長記〕

中宮の御産後初入内で、親能・隆保・公国・高能・定経・宗国・能季・定家・高通・親国・公定・朝経・雅親・忠行・九条良輔・土御門通具・頼房・資家・大炊御門頼実・定能・通親・権中納言（経房か泰通か親宗か隆房か通資）・光雅・公時とともに前軀をつとめる〔三長記〕

秋季仁王会に出席し、成家・経通・通具とともに御殿の出居に居る〔三長記〕

昇子内親王の侍始で、中門外西上北面に親能・公定・良輔・宗方・定経・親国とともに家司・職事として列立し慶賀を申す。季忠が承諾の意志を示すと、各々二拝する。侍所が立てられると、宗方・侍らとともに著座する〔三長記〕

春日大社の競馬で、黒木屋に入御があると、良経の沓を取る〔明月記〕

良経の任内大臣節会で、公卿が外弁の座に著した後、南階の左右に左近衛少将宗国・左近衛少将定家・左近衛少将公定・左近衛権中將実宣・右近衛中将成定・右近衛少将成家・左近衛少将高通・右近衛権少将忠行・左近衛少将経通とともに縫腋・壺胡籙に靴を著して陣

建久六年十一月十二日

建久六年十一月十五日

建久七年一月十日

(一一九六)

建久七年四月十七日

を引く。二献で勸盃をつとめ、五献の時実宣とともに録事・弁少納言の座を敷く〔三長記〕
良経の拝賀で、宗雅・成定・成家・高能・定経・顕兼・能季・隆保・定家・高通・宗隆・兼定・朝経・長兼・忠行・宗方・良輔・以政・兼親・能光・宗行らとともに前駆をつとめる。八条院で申次をつとめ、琵琶が贈られ女房が御簾の外へ出すと、これを取って前駆に渡す〔三長記〕

十一日の方違行幸に、高通とともに参加しなかったとして除籍されるという〔三長記〕

女叙位に遅刻したため、夜になってから後鳥羽天皇が出御する。藏人・御匣殿藏人叙位の後兼実と呼ばれ、院宮の御申文を持参する〔玉葉〕

定家が良経邸（兼実邸か）にやってきたとき、藏人知範が「雅行中将が、朔日に出仕せず四日に初めて参内したとき、白重を着していた。自ら言うに「白重は朔日の出仕によるべきではない。後日といってもこれを着して出仕するのは、何の問題もないと考える。」と語った。」と語る。良経（兼実か）は「公卿については、朔日に着るかどうかにかかわらず、灌仏の時に着る。殿上人については、詳しくは知らない。」と語る。知範が「忠国が言うには、故入道左大臣経宗様の説は雅行中将の言うとおりである。左大臣実房様はこのことをご存じだろうか。」と語ると、六条有家が「先年少納言だったとき、白重を用意したのだが、朔日急病によって出仕しなかった。三日に大納言坊門定能様が参議として、政を行うのに少納言が足りなかった。相談の結果出仕することになったが、染重を準備していなかったので、朔日に出仕せず白重を着するのはどうなのかと、父重家が内大臣中山忠

建久七年四月二十一日

建久七年五月六日

建久七年五月十五日

建久七年五月二十三日

建久七年五月二十五日

建久七年六月十三日

建久七年六月十四日

親様と源雅頼卿に確認したところ、「朔日に出仕しなかったのならば、白重を着すのは適當ではないだろう」と各々おっしゃった。だからその日は出仕しなかった。結局はその人の考えによるのだろうか。だが朔日より後に着しないのが、無難だろう。このことを先例とすべきだろう」と語る〔明月記〕

昇子内親王入内で、西門に入御があると、成家・信清・宗国・隆衡・知光・長兼・朝経・宗方・実宣・資家・有雅とともに列立する〔明月記〕

右近真手結で、右近衛少将坊門経通・左近衛少将坊門高通とともに出席し、北を上に着す。手結文がもたらされると封を加えて返す〔明月記〕

石清水八幡宮寺薬師如来立像供養で勅使をつとめる〔石清水八幡宮記録〕〔菊大路文書〕
〔石清水八幡宮并極楽寺縁起之事〕

最勝講始で、親能・公経・通宗・実宣とともに出居に着座する〔明月記〕

最勝講で、成定・家経・高通・師経・経通とともに出居に居る〔明月記〕

大内行幸で、後鳥羽天皇が出御すると保家とともに前後内侍に付く。その後、右近衛少将持明院保家・左近衛少将高通・右近衛少将三条公信・右近衛少将岡崎有雅とともに着陣する。御輿が寄せられると、他の将とともに昇って座る。定家や他の将とともに弓彊を同じ手（右手か）に持ち、御輿の左右にいる。大内に入御した後、御箱（御前か）内侍に付く〔明月記〕

還御で、出御があると親能とともに内侍に付く。右近衛少将成家・右近衛少将経通・右近

建久七年秋

衛少将有雅とともに本陣に向かう。閑院に入御があつたが、なぜか姿が見えなかった〔明月記〕

花筥が配られると、座の後ろを経て着し加わる。法用が終わった後、座の前より立ち、さらに北進して、公卿座の末・献花机内の前を経て、導師の右よりすすみより右に就く。指示した後、右廻りで帰ってくる〔明月記〕

建久七年十月二十五日

石清水行幸で、出御の時親能とともに両内侍に付く〔玉葉〕

建久七年十一月二十二日

賀茂臨時祭で臨時祭使をつとめ、申の刻にやってくる。二藍の上下に鶏冠・木衣を着した雑色を従える〔三長記〕

建久七年十二月二十六日

左近衛中将西園寺公経が左近衛権中将平松親能・右近衛権中将徳大寺実保・成定・右近衛中将（権中将か）坊門伊輔・左近衛中将（権中将か）河原公国・右近衛中将雅行を超越して蔵人頭になる。長兼曰く「このうち超越されてはいけない人が二三人はいようか。」〔三長記〕

建久八年二月二日

（二一九七）

近衛家実が任中納言慶賀のため参内すると、藤原盛能・藤原定国・源清信・源有道とともに扈從する。家実が弓場殿に進み立つと、事の由を奏して帰ってきて聞こしめすの由を仰す〔猪熊関白記〕

建久八年五月十七日

近衛基通の第二度上表で、光親に呼ばれ表宮をいただき、使として参内する〔猪熊関白記〕

建久八年七月五日

基通の第三度上表で使となる〔猪熊関白記〕

建久九年一月二日

近衛家の拝礼で、基通が上達部座南の階より下りると、沓を献ずる〔猪熊関白記〕

(一一九八)

建久九年一月三日

昨日、宗国が頸と袖に他文をあしらった袍を着ていたため、職務交代により近衛基通の拝礼の答拜で御沓を取る〔明月記〕

建久九年一月七日

白馬節会で、内裏にて左近衛少将定家が陣を引くと、右（左か）近衛中将成定・右近衛（権か）中将坊門伊輔・左近衛中将高通（確かには見ていない）・右近衛（権か）少将堀川通具・某（もう一人は確かに見ていない）とともに陣を引く。外弁が参入し仗を立てると、成定・通具とともに残り列立する。謝座・謝酒があると、定家とともにとどまる。成定（？）・伊輔・通具とともに尻を懸ける〔明月記〕

建久九年一月八日

近衛家実が任大將宣旨をいただくと、宗国・源兼定とともに共をして参内する。家実が着陣し奥の座に着くと、家実の指示で参入したことを密かに通宗に伝える〔猪熊関白記〕

建久九年一月十一日

警固で、公国・家経・宗国・教成・雅親・実宣・成定・伊輔・成家・保家・高通・公信・経通とともに陣を引く〔明月記〕

建久九年一月十五日

八条殿の昇子御節供で、垂纓を着し陪膳をつとめる〔明月記〕

建久九年一月十九日

左近衛中将〔公卿補任〕定家曰く、「後に聞くと、年預に就任するため左近衛中将としたという。」「〔明月記〕任大將除目目で、家俊・宗国・兼定・有通とともに共をして参内する。家実が弓場殿に進み立つと、慶賀を奏し、帯剣して帰り、聞こし食すの由を示す。家実が左衛門陣より出ると、宗国・藤原実宣とともに車で随う。中門より入り少将宗国・左近衛少将源雅親・左近衛少将実宣・左近衛少将藤原公明とともに一列で南庭に列立する。再拝

建久九年一月二十日

の後、家実が南廂上達部座の第一座に着し、「次将座に」との指示を光親が告げると、中門廊内より昇り、南面東第一間より入り座の後ろを経て着座する。勸盃で、居汁の後定経が基通の機嫌をうかがった後、次将・公卿らとともに箸で食事をする。禄として纏頭・綾の細長一領・濃袴一腰をいただく〔猪熊関白記〕家実の任大将儀で、家俊・兼定・清信・有通とともに扈從する。家実が無名門代の戸の前に進み立つと、帯剣せずに事の由を奏して、帯剣して笏を取って帰ってきて聞こしめすと伝える。家実が殿上人座に著すと、宗国・雅親・実宣とともに縫腋・蒔絵剣・平緒を著して中門付近より入り、南庭に一行になる。勸盃で、隆房より盃を回され、親宗に盃を渡す〔三長記〕

建久九年一月二十一日

家実の慶賀に、家俊・宗国・兼定・清信とともに共をする。院で、近武と諸大夫が馬を引いてきて家実が綱を取ると、これをいただき退出する〔猪熊関白記〕

建久九年一月二十八日

一昨日の近衛家実の任大将儀に、公房・宗国・雅親・実宣・公明・実宗・忠良・経房・親宗・隆房・通資・公継・兼忠・定経・家俊・資実・兼定とともに出席する〔明月記〕

建久九年一月二十九日

左近衛府年預。家実の指示で光親により近武・久景が派遣され、年預就任を指示される。その後家実と呼ばれ明日着陣することを指示される。家実の任大将直衣始で、家俊・宗国・清信・有道とともに共をする〔猪熊関白記〕

家実の任大将初着陣で、家俊・有道とともに共をする。家実が左仗外座に着すと、実宣とともに宣仁門代より入り参議の横切座に着す。請印の後、近衛二人が案を担いで宣仁門代より出ると、実宣とともに座を起ち宣仁門代より出る〔猪熊関白記〕

建久九年二月七日

建久九年二月十九日

建久九年二月二十日

有通・行房・範宗とともに、歡喜光院修二月会に出席するよう定家に催促される〔明月記〕

左年預〔明月記〕

土御門天皇の大内渡御で、公国・宗経・教成・雅親・実宣・公明・公清とともに、後から中門にやってくる〔明月記〕御輿が寄せられるとこれに従い、家実が警蹕を発するとこれに應える。南殿東西階を昇り、中央の間一見以外の御格子を下ろす。天皇が下御すると参上して格子を下ろし、範子内親王が輿より下りると格子をあげる〔左右次将・次将〕〔猪熊関白記〕御反問の後、南庭に列立する。駕御の後、東西より昇り御殿格子を下ろす。範子内親王が乗輿した後、天皇が下御したのに気づかず、何も確認せず御輿を担ぐ。事情を聞いた後再び御輿を寄せる。長兼曰く「もっともうろたえることだ。」。輿が紫宸殿に寄せられると、南殿の格子を下ろす〔左右将・左右近次将・次将・左右次将〕〔三長記〕後鳥羽上皇が最勝寺に御幸すると、宗国・清信・資家・親房・時賢・□□とともにやってきて蹴鞠をする。昇殿を解禁される〔明月記〕

建久九年二月二十六日

建久九年三月三日

土御門天皇の即位式で、南殿に御輿が寄せられると、右（左か）近衛中将公国・少将宗国・左近衛少将定家・左近衛少将公清・左近衛少将教成・左近衛少将雅親・左近衛少将実宣・左近衛少将公明・右近衛中将成定・右近衛（権か）中将伊輔・右近衛少将成家・右近衛少将保家・左近衛少将高通・公信・右近衛（権か）少将通具・右近衛少将経通・右近衛少将有雅・右近衛少将資家とともに挂甲を著し従う。休幕に入御すると南階東西に陣する〔三長記〕南面の東西階下に陣し、東登廊南面石階より下り、内弁幄の東・南を経て胡床に著

す〔建久九年御即位記〕

建久九年三月二十七日

石清水臨時祭で、兼定とともに勸盃の一献をつとめ、陪従に盃を勧める〔猪熊関白記〕

建久九年四月二十一日

後鳥羽上皇が二条東洞院御所に渡御すると、平実景・中原守正・清原助成・清原助直・秦末友・清原武次とともに左近の諸衛をつとめる〔師直記〕宗隆・成定・長経・家経・宗国・保家・高通・信雅・教成・兼定・親長・有通・雅経・範時・時資とともに殿上人として行列に加わる〔中都記〕

建久九年五月三日

左近府の騎射荒手番で、馬場の幄に着して家実の車の西で車を降り、宗国・実宣とともに次将座に座る。伯光重の後に射つ〔権中将雅行朝臣〕〔猪熊関白記〕

建久九年五月五日

左近衛府の騎射眞手番で、幄屋に権少将宗国・左近衛権少将雅親・左近衛権少将師経・左近衛権少将実宣とともに着す。伯光重の後に射つ。禄として白樹一領をいただく〔猪熊関白記〕

建久九年十一月二十一日

大内の殿上淵醉に、公国・経仲・隆雅・仲経・公清・教成・実宣・経通・清長・伊時・隆仲とともに出席する。五献で、心紐を解くついでに座を立つ〔自暦記〕

建久九年十一月二十二日

殿上淵醉に、公国・隆雅・中御門少将（教成か実宣か）・次弁・公清・兼定とともに出席する〔自暦記〕

正治元年一月十六日

（一一九九）

踏歌節会を欠席する。定家が先に梓を取って陣列させる。定家曰く「正四位下雅行・正四位下家経・左近衛（権か）少将宗国・正四位下公清・正四位下教成は、今は上位の五人である。だが、胡床が人数分なかったため第五座に着する。下位者が全員こないため空席が

あるからだ。」〔明月記〕

正治元年三月二日

鳥羽院御月忌に、定家・通資・成家とともに出席する〔明月記〕

正治元年三月十一日

土御門通親の任右大将拝賀で、雅親・土御門通具・兼定・清信・有通・通光・定通・通方・雅清・守通・助信・通資・源兼忠とともに参加する〔明月記〕

正治元年三月十四日

石清水臨時祭で、家俊・宗国・実宣・兼定・清信・有通とともに車で家実に扈從する〔猪熊関白記〕

正治元年四月十八日

基通が内舍人・隨身を辞する上表をすると勅答使をつとめる。中門に立って光親と会い、家実が中門廊南妻より降りると光親とともに跪く。笏を指に挟み函を取り、左廻りで帰って昇り便宜所に持参する。光親よりの家実の指示で椅子に着す。家実が下ろうとすると、座を起って便宜所を徘徊する。椅子を徹して平敷座が敷かれると、光親からの家実の指示で着座する。家実が禄の大掛一重を座の前に寄せると、笏を抜いて帰り禄を肩にかけて座を起ち、中門廊南妻より降りて前庭を進み、再拝して退出する〔猪熊関白記〕

正治元年五月六日

左近府の騎射眞手に、宗国とともに出席する〔猪熊関白記〕

正治元年五月九日

新日吉小五月会で、競馬の左行事をつとめる。上皇が簾下より番文を差し出し兼雅が受け取ると、兼雅に呼ばれこれを受け取る。成定とともに庭中座に着す〔猪熊関白記〕

正治元年六月十三日

土御門天皇の大内行幸で、御輿が寄せられると左近衛少将中御門宗経・左近衛少将風早公清・左近衛少将唐橋雅親・左近衛少将大炊御門師経・左近衛少将坊門隆清とともに列立する。出御の時、二三人で静かに西方より出る。定家曰く「騎馬とは不当である。」（雅行之

輩）〔明月記〕

正治元年六月二十二日

任大臣儀で、宗国・実宣・兼定・清信とともに殿上人として家実と共に参内する。家実が慶賀を奏すと、無名門代下にやってきて家実の用件を聞き事の由を申す。帯剣して笏を取り、初めの所にやってきて聞こし食すと示して帰る。通親邸の大饗で三献をつとめる。

家実のそばに禄が置かれると、家実に呼ばれ禄を取る〔猪熊関白記〕

正治元年六月二十五日

家実が鳥羽院御所へ慶賀に行くと、家俊・成家・隆雅・宗国・高通・実宣・平親国・源兼定・清長・源清信・長兼・光親・有通・家衡・季清・高階基邦・季佐・平信広・平親輔・高階仲基・藤原教房・藤原為成・藤原重邦・高階泰信・高階仲国・源定清・橘以輔・藤原季宗・高階泰時・源泰宗・藤原佐清・平棟基・藤原為永・高階泰範・吉田経房・堀河光雅・八条宗隆・三善盛元・豊原公秀・下毛野武守・下毛野久武らとともに共をする。家実が引き出物の馬の綱を取ると、これを受け取る〔猪熊関白記〕

正治元年七月四日

家実の直衣始参院・参内で、家俊・宗国・高通とともに殿上人として共をする〔猪熊関白記〕

正治元年七月九日

勸学院衆徒が慶賀にやってくると、成家とともに三献をつとめる〔猪熊関白記〕

正治元年七月十三日

家実の任大臣初着陣で、経房・光雅・定経・宗隆・家俊・宗国・兼定・清信とともに共をする。家実が上達部の座の南階より降りると沓を取る〔猪熊関白記〕

正治元年八月十五日

石清水放生会に、通親・宗隆・弁・通具・有道とともに出席する〔猪熊関白記〕

正治元年十一月十五日

五節の童女御覧で、高通・宗国・実宣とともに簀子敷に居て、高通とともに前童の童女扶

持人をつとめる〔猪熊関白記〕

正治元年十一月二十一日 賀茂臨時祭で、高通とともに重盃を勧める〔猪熊関白記〕

正治元年十一月二十七日 土御門天皇の二条第行幸で、本宮に還御後、鈴奏の後名謁を問う〔猪熊関白記〕 秦兼隆とともに引き出物の馬を受け取る。公卿らが禄をいただと、家実の禄を受け取る〔三長記〕

正治元年十二月十九日 内裏御佛名に出席し、勸盃で一献をつとめる〔猪熊関白記〕

正治元年十二月二十四日 吉田経房の新御堂供養に、定家・隆房・宗頼・実教・中山兼宗・宗隆・公時・成経・経家・

親雅・基宗・親経・資実・隆信・顕家・成家・公清・実宣・親実・範光・長房・清長・長兼・光親・資経・行房・顕俊・兼隆・知長・朝基とともに出席する〔明月記〕

正治二年一月一日 近衛基通邸の拝礼で、家実が中門廊内より中門下に進み立つと、沓を持参する。宗国・実

（一一〇〇）

宣とともに元日の節会に従う〔猪熊関白記〕元日の節会に共する。土御門天皇がたまたま南殿に出御すると、左近衛中将宗国・左近衛少将定家・右近衛中将成定・右近衛（権か）中将成家・左近衛権中将高通・右近衛少将兼季・公信・雅平・右近衛少将資家とともに陣を引く。下襲の裾をおろさなかった。警蹕の後、胡床に座り内弁が軒廊を進むと、他将とともに階下に寄り退入する。謝座の後盞が酒正に返されると、笏を取って揖して、立って揖した後昇って着座する〔明月記〕

正治二年一月七日

内裏の加叙で、下名が二省に下された後、定家の合図で陣を引く。宗国・左近衛少将教成とともに胡床を置かなかった。夜に定家が、加叙での装束について、源氏一門の故実があるのかと聞かれると、「一門かどうかということではなく、一般常識だろう。」と答える。

正治二年一月十六日

これを聞いた実宣に大笑いされ、「話にならない。」と言われる〔明月記〕
昇子内親王が八条院より院に還御すると、闕腋を著して八条院へ行く。定家はその後見ていない〔明月記〕

正治二年二月三日

春日祭の行列に、束帶・打□を著し参加する。隨身は古い袴を著す。定家曰く「邪道な□物か。」〔明月記〕

正治二年二月四日

春日祭で、家実が黒木屋北面に到着すると、杵を持参する〔猪熊関白記〕

正治二年閏二月二十四日

五条尼上の五七日仏事に、束帶を著して出席する〔明月記〕

正治二年三月三日

基通の平等院一切経会で、雨が上がった後宗国とともに呼ばれ左の樂行事をつとめる。宗

国とともに布衣を着ていた〔猪熊関白記〕

正治二年三月二十一日

八条院御影供に、雅隆・成家・知長・隆範・隆兼とともに出席する〔明月記〕

正治二年三月二十七日

石清水臨時祭で、宗国とともに重盃を勧める〔猪熊関白記〕

正治二年三月二十九日

資宗（家か）が定家に、「臨時祭の初献は仲経、二献は右府家実、三献は土御門通具、重坏は雅行と宗国でした。社頭の舞人は遅く、明るくなってから始まりました。」と伝える

〔明月記〕

正治二年五月三日

左近衛府の騎射荒手番に、実宣・清信らとともに出席する〔猪熊関白記〕

正治二年五月五日

左近衛府の眞手番に出席する？〔次将二人〕〔猪熊関白記〕

正治二年五月二十六日

肅子内親王御褰で、公国・高通・家衡・右兵衛佐家隆（永隆か）らとともに前驅をつとめる〔猪熊関白記〕

正治二年六月十四日

正治二年十月十七日

正治二年十月二十日

正治二年十一月十四日

正治二年十一月十五日

正治二年十一月十六日

正治二年十一月二十三日

正治二年十二月十九日

土御門天皇が中院第に渡御すると、通親が進めた馬を清信・通親の隨身・官人・番長とともに引く。本宮に還御すると名謁を問う〔猪熊関白記〕

殷富門院の御堂供養で、法眼（法服か）の被物を取る〔明月記〕

土御門天皇が二条第に方違行幸すると、通具とともに璽剣に付く〔猪熊関白記〕

五節で、通具・家俊・顕兼・定家・有通とともに五節所へ向かう〔明月記〕

童御覽で、一番最初に内裏に居る。通具・資実・家俊・高通・雅親・定家・経通・清長・長兼・伊時・資家とともに出席する〔明月記〕

豊明節会で、舞の時に定家・高通とともに剣を解かなかった〔明月記〕

安楽寿院御仏事に出席し、光盛・長経・雅親・定家・親国とともに布施を取る〔明月記〕

内裏の御佛名に出席し、年中行事障子付近の出居に宗国・定家・実宣・雅平とともに居る。実宣とともに小庭を経なかった。実教が着座すると名謁をする。六条公継が幔の下にひざまずいて、しきりに出居の方を見ていたため名謁をするが、他の人々より不審がられる。

定家曰く「人ごとにさらに名謁はしなくていい。思慮が足りないのだろうか。ただし、出居を見ていたとしても、名謁をしなくてよかったのだろうか。」公卿が殿上に着すると、小板敷に列座し一献をつとめる。実教が奥にいたので、台盤の上より奥に着して勧める。その後出居座に還る。定家曰く「雅行は年預で行事のため座に還った。他將は早く還るべきだったのだろうか。」一献巡行の後、人員不足により資実・通具とともに行香に加わる。定家が三献の盃を宗国に譲ると、宗国は雅行に渡し、雅行は定家に盃を授ける。定家は実

宣に譲ろうとするが遠くにいたため気づかず渡せなかった。そのため再び雅行に渡しても
らいようやく実宣に渡す〔明月記〕

正治二年十二月二十一日

上皇が宜秋門院邸より還御すると、土御門通親・通資・実教・公継・公経・土御門通具・
成家・宗国とともに御所へ行く〔明月記〕

正治二年十二月二十四日

弓場始で、天皇が出御するとやってきて、軾に着き「召す。」といって諸卿を呼ぶ。諸卿
が笏を正すとこれに目配せをして退帰する。通具が家実の前に付くと、能射人として実教・
季能とともに指名され、家実からこれを告げられる。指名されると知っていたので、ほん
の少し座す。実教とともに座りながら装備する。従二位皇后宮権大夫（権中納言）実教・
正三位大皇太后宮大夫季能に続き射つ。季能・隆衡・経通・家衡とともに後方の射手を勤
める〔猪熊関白記〕

正治二年十二月二十五日

大仁王会で、成家・高通とともに出居に居る。予・実教・宗頼・公房・親雅・高通・成家・
兼定とともに行香に加わる〔歴代残闕日記〕

建仁元年一月二十三日

（一一〇一）

朝覲行幸で、宗国・左近衛少将雅親・左近衛中将公経・左近衛少将定家・左近衛中将坊門
隆清・左近衛少将実宣・左近衛少将閑院公雅・右近衛中将御子左成家・俊家・右（左か）
近衛権中将高通・右近衛中将師経・右近衛少将兼季・右近衛少将坊門経通・右近衛少将有
通・右近衛少将平松資家とともに列立する。高倉面より入御し、左近衛大将家実と右近衛
大将通親が立ち替わると、次将とともに立ち替わる。還御の後、陣を引くよう指示がある
と、再び陣を引くよう号令する。宗国らが後からやってきて列立するが、雅行は来なかつ

建仁元年一月二十九日

建仁元年二月二日

た〔明月記〕

備後介兼務〔公卿補任〕

春日祭陪從裝束八具を、家実から以輔により贈られる。家実曰く「この人は大将祭の時、恒例の所役であるとのこと。先日雅行がやってきて申請した。」。基通より、舞人の半臂・下襲が遣わされる〔猪熊関白記〕

建仁元年二月三日

春日祭近衛使となるが〔春日祭歴名部類〕、觸穢により欠席する〔東進記〕

建仁元年三月三日

基通の平等院一切経会で、宗国とともに樂行事をつとめる。小河廊壺にて、水干を着て胡飲酒を舞う〔猪熊関白記〕

建仁元年三月二十一日

昨日の石清水臨時祭で、宗（実か）宣とともに重坏をつとめる〔明月記〕〔建仁元年熊野山御幸記〕

建仁元年八月二十八日

北小路道経が任権大納言の慶賀のため内裏にくと、申次をつとめる〔三長記〕

建仁元年十一月二十日

童女御覽で、高通とともに道経の童女に付く〔猪熊関白記〕

建仁元年十一月二十一日

五節で、高通とともに道経の童に付く。定家曰く「これにより、寅の日には出仕しないという。」。豊明節会で内裏南殿に出御があると内侍に付く〔明月記〕

建仁元年十一月二十六日

賀茂臨時祭で、殿（家実か）の共をする。長兼が所労により欠席すると、近衛基通の指示で、高通とともに重坏をつとめる〔明月記〕

建仁二年一月六日

上皇の七条院三条烏丸第御幸で、近衛家実の共をし、車宿の前に騎馬せず列立する〔明月記〕

（一一〇一）

建仁二年一月十二日

法勝寺への修正御幸で、通親・忠経・通経・実教・公継・公房・坊門信清・定輔・公経・資実・隆保・範光・通光・仲経・顕家・大宮実宗・成家・長経・高通・公清・教成・定家・定通・公信・実宣・経通・有雅とともに参加する〔明月記〕

建仁二年一月十八日

蓮華王院の仏事に、隆衡・成家・長経・定家とともに出席する〔明月記〕

建仁二年一月二十七日

尊勝陀羅尼供養で、成家・宗国・定家とともに経を運ぶ。雅行は下襲の裾を懸け、他の六位蔵人（二か）人は裾を引いていた。承明門院の御行始で、二条殿院御所に家保（家俊か）・六位蔵人とともに北の列にいる〔明月記〕

建仁二年三月七日

八幡・賀茂御幸定で二条殿院御所へ行き、競馬左頭となる。公卿座の末の奥に着す〔猪熊関白記〕

建仁二年三月十日

定家に、二十四日に城南寺馬場にて内の競馬があること、二十六日の八幡と二十八日の賀茂の纏頭を用意するよう、との奉書を送る〔雅行中將（雅親か）〕〔明月記〕

建仁二年三月二十四日

鳥羽城南寺競馬に参加し、高通とともに基通に呼ばれ、乗尻交名をもらう。基通が御前座に座ると、束帯を着して御前座に座る〔猪熊関白記〕

建仁二年三月二十六日

石清水御幸で、高通・教成・定家・実宣・雅平とともに唐尾を結び殿上人として参加する。舞樂が行われると、馬場御所の乾方の桜付近に、長房の禄とともに禄が置かれる。競馬奏で、高通とともに乾方の桜の木陰に待機する。西薬屋東簾下が念人座とされると、高通とともに三人を引き連れ座の北付近に立つ。競馬で中臣近武が鼓勝負で勝ち、御前に駈け参ると行事に立つ。宗国・定家とともに禄として単衣の柏をいただき、座に戻る〔明月記〕

建仁二年三月二十八日

賀茂御幸に参加し、競馬で敦助が鼓勝負で勝ち御前に参ると、家国（宗国か）・定家とともに禄として柏をいただく〔明月記〕

建仁二年四月三日

御方違行幸で、たまたま出御があると、中門に向かう（左将等）。雨が激しいため定家・実宣とともに、御興長に雨皮を指示する。雨皮・綱が整った後、成家とともに御座を見る。鈴奏の後、笠を取って進み（次将）、簷の内で笠を捨て、階の前に立って座らなかった〔明月記〕

建仁二年四月二十日

建仁二年五月五日

院にて、公清とともに日吉の競馬を引く評議をする〔明月記〕
府の眞手番で、実宣・清信らとともに参加する。本府年預「権中将雅行朝臣」（猪熊関白記）

建仁二年六月二十五日

季御読経結願で、明禅導師が敬白すると、剣を着けながら出居座を起ち、公卿座の末と前を経て、導師座の後の長押の上に就く。度者を指示された後出居座に戻る。家実・実教・親経・資実・他の出居の次将二人・光親とともに行香する〔猪熊関白記〕

建仁二年八月十六日

駒牽に、兼忠・公定・親国・清長・光親・成家・高通・公雅・雅親・兼定・定家とともに参加する〔明月記〕馬一疋を近衛家に持参し禄をいただく〔猪熊関白記〕

建仁三年一月一日

（一一〇三）

院拜礼に出席し、上衆として、成家・高通・教成・有家・定家・隆清・経通とともに列立する。出御の後警蹕するが音は聞こえなかった〔明月記〕

建仁三年一月四日

上皇の御幸始で、成家とともに車宿りの北に列立する〔明月記〕

建仁三年一月七日

白馬節会に出席し、下名の後定家とともに前後内侍に付く。定家が棹を取って陣を引くと

実宣・伊時とともにやってくる〔明月記〕

建仁三年二月二日

家実が内裏へやってくると、宗国とともに共をし、女房に來たことを報告する〔明月記〕

建仁三年二月四日

成家・高通・家衡とともに院の指示により、陪膳をつとめる〔明月記〕

建仁三年二月二十二日

院尊勝陀羅尼供養に、泰通・源通資・忠経・坊門信清・良輔・宗隆・公国・雅隆・隆衡・雅親・公定・成家・高通・実宣・経通・雅平・定家とともに出席する。他の殿上人ともに、裾を曳いて経を運ぶ。公卿の後僧綱の裏物を取る〔明月記〕

建仁三年五月六日

府の騎射眞手番で、経通・清信とともに出席するよう何度も家実に呼ばれるが、所勞といつて欠席する〔猪熊関白記〕

建仁三年五月十五日

内裏最勝講始で、高通・定家・経通・資家・守通とともに出席する。行香が始まると、高通・定家・経通とともに立つ〔明月記〕

建仁三年五月十八日

最勝講の後、高通とともに家実に共をして六条殿へ行く〔明月記〕

建仁三年五月二十七日

法勝寺八万四千基塔供養で、高通とともに樂行事をつとめる〔左右年預〕〔明月記〕

建仁三年九月二十四日

仁王経結願に、隆忠・泰通・源通資・西園寺公経・家経・範光・雅親・公定・隆雅・高通・

定家とともに出席する。諸衛の佐が支障があるとして欠席すると、前日に隆仲・雅経とともに御馬を引くよう言われるが、支障があるとして拒否する。御馬を東に置くことになる

と、源雅親が障子上の東の扉を片づけるが、荒っぽくやったため雅行と高通の袖に当た

建仁三年九月二十九日

〔明月記〕
承明門院の源通親法事に、定輔・範光・雅隆・隆衡・親兼・高通・定家・清信・親国と

もに出席する〔明月記〕

建仁三年十一月十八日

院十二社奉幣で、御幣の案の前の円座に定家・公雅・清信・保季・長俊・親輔・盛経・経高・知家・時資・信定とともに座る。源通資が東の対南面一間から使を呼ぶと、最初にやってきて御幣をいただき出る〔明月記〕

建仁三年十二月二十二日

上皇の北野御幸で、乙殿屋に入御があり、公卿らが御前に着し家実が左右の奏を執ると、高通とともにこれを取り継ぐ〔明月記〕

元久元年一月五日

(一一〇四)

元久元年一月九日

上皇の御幸始で、八条院にて細大刀を帶し、蘇芳袴の隨身をつれ、高通・定家・経通・有雅・資家・時通・親長・範茂とともに列立する〔明月記〕

元久元年一月十二日

雅成親王の御著袴御幸に出席し、高通・経通とともにやってきて待機する。著袴の後、劔・笏を片づけて、高通・定家・経通・公氏・長兼・伊時・資家とともに東の小壺にて蒔絵御台・銀器を取る。殿上の障子上の北庇・障子の上を経て妻戸を出て、透渡殿の階の東の間を経て御前物を供する。上位者二人（雅行と高通か）が担いで返す（鼻返か）〔明月記〕

元久元年三月二十八日

法勝寺修正御幸で、松明を取らずに笏を取り、歩み入り列立する。定家曰く「経験を積んだ老人だからか。異様である。」〔明月記〕

元久元年五月九日

〔明月記〕
新日吉会に、隆房・通資・良経・中納言殿（良輔か）・有家・信定・清長・高通らとともに出席する。高通とともに乗尻交名をいただくとき帯剣せず、流鏑馬の後騎手がやってく

元久元年五月二十七日

るときに劔をつけて座る〔明月記〕

季御読経結願で、公卿が殿上に着座した後やってきたので、経通・公雅・公棟が第二座に着す。堂童子が進出すると、年中行事の西を経て、出居の後に着す。堂童子が花菖を配ると、座を起ち公卿の座の前を経て、立ちながら長押に昇り跪き、導師の右に就く。度者を指示した後、右廻りで帰り着座する。行香が行われると、経通・三人（公雅・公棟・定家か）の後に出居を起つ〔明月記〕

元久元年六月二日

寛成親王の五十日儀に頼実・家実・泰通・隆房・通資・公房・道経・通光・定輔・親能・親経・雅親・良平・隆雅・公頼・顕兼・宗経・高通・定家・実宣・経通・公氏・長兼・伊時・国通・清信・親輔・頼房・長季・信定・隆仲・兼隆・仲房・資経・棟基・宣家・基定・経高・光親・宗行とともに出席する。宗経・高通・定家・実宣・経通・公氏（出世の見込みのない四位の殿上人）とともに、劔・笏を持たず御台を取ってやってくると、陪膳に、「女房がまだ座らないがどうしたらいい。」と言われる。しばらくして女房が西面を経て座ると、御台を供して帰る。定家曰く「正四位下左中将雅行・左近衛中将宗経・正四位下左近衛権中将高通・正四位下左近衛中将たる私・正四位下左近衛権中将実宣・正四位下左近衛中将経通・従四位上右近衛中将公氏と、ここにいる身分年齢様々な中将はこれで全員か。全員正四位下皇后宮亮・藏人頭親国のために官位などを超越された面々である。」〔明月記〕

礼子内親王御着袴儀で、宗経とともに役送をつとめる〔明月記〕

上皇の五辻御所御移徙に、宗経らとともに欠席する〔明月記〕

元久元年六月二十三日
元久元年八月八日

元久元年八月十八日

八条院の八幡御幸で、定家・雅清・行長・仲房・信実とともに騎馬で供奉し、御奉幣をつとめる〔明月記〕

元久元年九月三日

源宗雅の仏事に、有家・定家・頼房・保季・敦房・長俊・棟基・信光・国基・行経とともに出席する〔明月記〕

元久元年十一月三日

石清水行幸で、職事・定家とともに日御座西で出御を待つ。出御の後内侍に付く。奉行職事顕俊が左近衛少将時通・公棟・忠定に渡るよう指示すると、右近衛少将守通とともに御座を見る。御輿が寄せられると、定家・実宣・経通・公雅・雅清とともに列立する。良経が騎馬すると、次将らとともに騎馬して供奉する。定家曰く「そんなに遠い距離ではない。大変普通なことのようなだが、隊列は乱れていた。」上皇が六条堀川の栈敷で見物すると、弓を取り大宮南・七条西・朱雀南を行く。鳥羽今里より出るときは居なかった〔明月記〕賀茂御幸に出席し、次将とともに左近衛大将家実を守り、御輿が下社に着くと地面に座る。御輿が寄せられると警蹕を称す。還御すると、階下にとどまる。良経・家実・忠経・公継・公房・兼基・公経・公国・資実・通具・隆衡・隆雅・親兼・良輔・良平・師経・定通・定家・経通・公雅・雅清・飛鳥井雅経・公棟・公氏・忠信・守通・家信・時通・忠明・忠定とともに供奉する〔明月記〕

元久元年十一月十三日

元久元年十一月二十日

五節で、経通・有雅・公雅・国通・時通・忠定・雅経・時賢とともに門の付近に配置される〔明月記〕

元久元年十一月二十二日

八幡行幸で社頭にこなかったとして、高通・経通・公雅・雅清・公棟とともに明日拘禁さ

元久元年十二月二十二日

れると噂される。豊明節会で、経通・清信・雅清・時通・雅経・国通・資家・重通・頼平・家信・時賢とともに陣を引く〔明月記〕

家実の任左大臣拝賀で、中将中御門宗経・左近衛少将坊門清信とともに殿上人として共する〔兼仲卿記裏文書〕

元久二年一月五日

(一一〇五)

四日の上皇の御元服で、経通とともに靴をつけて尻を曳いて敷政門より出る。その後橋を渡る。公定（国通・経通か）に、「橋は通ってはいけないことを知らなかった。」と語ると、公定（国通・経通か）に「大内は今年初めの皇居ではない。天皇陛下は南殿におられる。

左近衛次将は、浅履に尻を懸け、露台の階を下り、青璅門・敷政門を経て、橋を渡らず柱の南を経て日華門に到る。靴をつけて尻を曳き、官人が抜き取った梓を取って、進んで陣を引き、外弁が参入して仗を立てる。このことについては古老や賢者に従うべきではない。」と言われる。定家曰く「今考えるに、中山内大臣は露台を下りて靴をつけ、青璅門・敷政門を出るとされた。雅行の考えは知らないが、形は整っているといえようか。」〔明月記〕

元久二年一月十九日

土御門天皇の朝覲行幸で、時賢・頼房・資家・忠信・高通・定通・良輔・公棟・雅清・某・九条道家・実宣・公宣・雅親・良平とともに前陣をつとめる〔明月記〕

元久二年三月十四日

元久二年四月二十七日

元久二年八月二十九日

石清水臨時祭で、実宣とともに重坏をつとめる〔明月記〕

良経が太政大臣辞任を上表すると、勅答使をつとめる〔明月記〕

八十島典侍発向に欠席する。定家曰く「数日間了解していたのに、今日居ないのはなぜか。最近の勝手気ままな心持ちだから、あえて嫌うこともないかな。」〔明月記〕

元久二年十二月六日

弓場始に出席し、あらかじめ出居の座にいて天皇が倚子に座ると警蹕を称す。出居より将監を二音で呼び、的を設置するよう指示する。定家曰く「二音とは未だ聞いたことがない。将監を呼ぶことを思いすごしていたか。変である。」。座を立て座の後ろより、幔門を出て陣・幔門に向かう。座に復して階下に立ちとどまり、藏人が御射席を撤収すると、的を替えるよう指示する。定家曰く「また二音だ。変であって変である。」。職事が、矢取内監に座るよう何度も指示する。定家曰く「これは出居が指示するべきではないだろうか。」。実教・隆衡が復座した後、座りながら装備して、射した後復座する。実教・従三位藤原朝臣（公定・良平・長房・伊輔・実保・顕家・長経・成家・公清・隆雅・公頼・公信・親兼・隆清・親実・信定・基忠か）・経通・隆宗とともに前方の射手を勤める。御膳が供されると跪き、終わった後再び射る。公基とともに三度目の矢を当てる。公房が矢を引いた後、庭上に一列になって拝し、張弓に鞆をつける。二度目に顕兼が射とうとしたとき、的付近が暗かったのを定家が見て、出居を見ると雅行は弓の構えをしていた。そのため定家が上位者として、火を明るくするよう指示する「出居・射手」〔明月記〕

元久二年十二月十九日

方違行幸で、出御があると御前内侍に付く。右近衛少将頼房・右近衛少将家信・右近衛少将時賢・左近衛中将定家・左近衛権中将実宣・左近衛中将経通・左近衛少将忠明らが殿上口より陣に向かうと行かずに御座を見る。御輿を寄せるとやってきて、劍璽をつとめる。警蹕・出御の後どこかへ行く。五辻御所に上皇が降り立つと、夜通し同じ座にて寝ていたが、再びどこかへ行く〔明月記〕

元久二年十二月二十日

建永元年五月六日

(一一〇六)

内裏御仏名で、清信とともに渡殿よりやってきて出居に加わる。公卿三人（通光・師経・通具か）が着座した後幔下に進むと、名謁を行う〔明月記〕

天皇の殷富門院安井第方違行幸で、南殿に出御があると璽篋の内侍を伴う。南階に御輿が寄せられると、裾を垂らさずに靴を脱ぎ、階の西の掖より昇り、弓を簀の子付近に置く。

御輿の戸を開け跪いて璽箱を取り、御輿の中に置き簀の子に退出する。天皇が乗御すると、御草鞋を取って東童に渡す。御剣を取って御輿の中に置き、戸を閉めて弓を取り退下する。御輿が安井殿の寝殿南階に寄せられると、やってきて御輿の戸を開き璽篋を取って、跪いて内侍に渡す。東童が西の簀の子に草鞋を持ってくると、これを献ずる。下御の後、御剣を取って内侍に渡し、御輿の戸を閉じた後退下する〔猪熊関白記〕

建永元年五月二十九日

建永元年五月三十日

最勝講結願で、堂童子が花篋を徹した後度者論義を指示する〔猪熊関白記〕
二十八日の新日吉小五月会で、高通が欠席したため、剣を帯して半靴を着し、一人で競馬の鼓をつとめる〔明月記〕

建永元年八月十六日

建永元年十月三日

駒牽で、暁に馬一疋を伴いやってきて、中門外に立って参入する〔不知記〕

長兼が家実、「多忠成の死の後、胡飲酒の舞はされなかった。なので、多好方が雅行に胡飲酒の舞を習うよう命令を下せと、後鳥羽上皇の指示があった。」と伝える。家実曰く、「このことは、先日私に相談されたとき、好方が雅行に習うのがよろしかろうと考え述べた。雅行は安元御賀の時に胡飲酒を舞った。今は、殺害された忠成の父忠時（節）にこれを習った。忠成とその兄景節という舞人がいて、胡飲酒を舞っていた。父忠時（節）は様々

なことを弟の忠成に任せていたので、これに腹を立てた。先年頃より関東にいたという。

忠成を殺害したのは、景節の仕業という。であるからして、検非違使庁に呼ばれたという。」

〔猪隈関白記〕〔不知記〕

建永元年十月二十三日

建永元年十一月十二日

建永元年十一月十五日

建永元年十一月二十六日

五辻殿への方違行幸で、出御があると御前内侍に付く〔明月記〕
五節で、宗経・高通を伴わず車寄門内に配置される〔明月記〕
五節で、出御があると高通とともに内侍に付く〔明月記〕〔近衛司〕〔猪熊関白記〕
近衛基教の元服で理髪をつとめる〔猪熊関白記〕基教が円座に著座すると、束帯で円座に著座し理髪が終わると便宜所に退下する。加冠の後、やってきて髪を直して退下する〔不知記〕

建永元年十一月二十八日

弓場始で、忠信が欠席したため定家とともに御剣を取る。出御以前に着座して、警蹕の後将監を呼びの指示する。定家曰く「今夜はいつものように一音であった」。起った後座の前より出て公卿を呼び、幔門より出る。家信が着した後、帰ってきて幔外に座らずにいる。家経が着座した後、後ろより復座して上卿の意向をうかがうが、特に意向がなかった。その後定家に「的を替えるのに、上卿の意向は関係ない。すぐに指示すべきだろう。」と言われるが、納得せずにしばらく様子をうかがう。光親が能射の人を上卿に指示すると、隆衡・教成とともに装備して射ち、終わった後座の前より移動して復座する。隆衡・定家・隆宗・季房とともに前の射手を勤め、隆衡が一本目を射った後二番手の準備をする。雅行が一本目を射った後、定家が座の前より立って次の準備をする。終わった後出居に戻る。

建永元年十二月三日

建永二年一月一日

(一一〇七)

建永二年一月二日

二度の時、御膳が供されると跪き、終わった後立って射ち、終わった後座に戻る〔明月記〕
家実が御後の円座に座ると、的を懸けるよう指示し、家実の意向により仗座に向かい公卿を呼ぶ。座を起った後、次将・定家が代わって着座し、その後雅行が復座する。矢取内監が着座すると、的を替えるよう指示する。光親が能射人を権大納言（兼基か）に指示すると、隆衡・教成らとともにこれを勤める。正三位檢非違使別当（右衛門督）隆衡・從三位左兵衛督教成に続いて射つ。御膳が供されると座る〔猪熊関白記〕出御があると、矢を差し挟んで弓を持ち軾に著して公卿を呼ぶ〔三長記〕

近衛基教が元服すると、理髪をつとめる〔明月記〕

院の拝礼に参加し、顕兼・宗経・高通・定家・実宣・忠信とともに一列になって列立する。内裏の小朝拝で、家実が小板敷にて靴を着すと、近くにいる。定家らが天皇の出御を待っている、南殿より陣にやってくる〔明月記〕

朝覲行幸で、宗経・左近衛中将定家・左近衛權中将実宣・右近衛中将頼平・左近衛中将公明・左近衛少将伊時・左近衛少将清信・右近衛少将雅清・左近衛少将雅経・左近衛少将忠明・中宮權大進宗行・左近衛少将忠定・通時・左近衛權中将高通・右近衛中将忠信・右近衛中将公氏・右近衛權中将有雅・右近衛中将兼季・右（左か）近衛中将松殿忠房・右近衛中将公雅・守通・右近衛少将平松資家・右近衛中将衣笠家良・右近衛少将家信・右近衛少将時賢・具親・敦通とともに列立する。次将らとともに、中門内外の御輿南の未申・巽あたりにいる。左近衛の上臈四人（定家・実宣・宗経・雅行か）が「東宮守成親王様が参上

建永二年一月九日

建永二年二月十一日

建永二年四月九日

建永二年六月二十二日

なすったときに、仗に立つということは、先年内大臣様（実宗・忠経か）の命令によりそれぞれそれぞれ立ちました。このことは今も適用できようか。今年はどうだろうか。内裏の式では、近衛の次将の起居は逐一報告する。太子が参上したときは起つのを報告しない。今考えるに、立ってはいけなのだろうか。」と話し合う。陣を引くことになる、「上皇陛下が出御された後、陣を引くべきか。」と言う。先に陣が引かれると、それぞれ胡床の前に立つ。土御門天皇が渡御すると、宗経・実宣とともに警蹕を行う。樂行事が呼ばれると、前より進み立って家実の後ろを北面して進む。高通が階前を渡り雅行の東に立つと、召しを承り、左廻りで仗の後ろより楽屋に向かう〔明月記〕

承明門院の南山御精進屋御幸で、高通とともに参加を了解するが、基教の侍従拝賀御共のため欠席する〔明月記〕

任大臣節会で、二献をつとめる〔明月記〕

召しにより馬場にやってきて、競馬のことを了承する〔明月記〕

言うまでもないということで、府年預を定家にするよう内示がある。定家曰く「このことは特に望んでいたわけではないが、この職務にあって年月を積んだれば、このことは本意とすべきである。このとき適任者がいないためだ。雅行は辞退したろうか。宗経も同じような人間だ。実宣は藏人頭に任命されたので就任できないし、位も低い。経通は母の喪に服しており、大将になったばかりの道家様にとってはばかりがある。国通は兄経通を差し置いてはいけない。しかし、これらの考えにかかわらず、すでに決定されていたという。

建永二年七月二十八日

内々にこのことを聞いた。」〔明月記〕

建永二年八月二日

白河新御所御幸で、車に乗ってやってくる。入御があると、宗経・高通・顕兼らとともに列立するが、一人だけ笏を持って列立する。定家曰く「既に決まっていることだ。自分だけ昇り進むつもりか。」〔明月記〕

昇子内親王侍始で、出席を了解するも対応する人がいなかったため、やってきたが行えなかった〔明月記〕

建永二年十月四日

弓場始で射手となる〔明月記〕

建永二年十月五日

弓場始で、親輔が定家に召をつとめるよう言う。「源中将雅行がやってきたら、かの人がつとめられるだろう。」と言うが、「射手をつとめているとはいっても、出居に支障があるといっていた。この上はあれこれ言うべきではない。」と答えられる。実宣が能射人を指示すると、教成・従三位藤原朝臣（長房・顕家・成家・公清・隆雅・公頼・公信・親兼・隆清・親実・信定・基忠・基行・忠房か）とともに射る。乙矢を当てた後、出座に着す。初矢を放った後、定家が立って手を継ぐ〔明月記〕

承元二年十一月二十三日

十八日夜の五節に出席し舞う〔明月記〕

（一一〇八）

承元三年三月二十三日

（一一〇九）

九条立子入宮で、定家・有能・能季・保季・公氏・国通・公雅・資家・忠清・清季・長俊・兼時・忠定・隆宗・実信・時賢・泰光・宣房・親房・知長・資経・宗行・経高・兼隆・長綱・長季・信定・棟基・定高・定親・基定・長資・実俊・宣家・隆俊・具兼・定衡・頼資

承元四年九月二十五日

(一一一〇)

とともに前軀をつとめる〔玉葉〕

慧星による御読経で、堂童子が花筥を片づけた後、導師の座の下につき、御願の趣旨を指示する。道家曰く「必ず最初に上卿の意向を聞いてから指示するものだ。今の作法は失礼である。」〔玉葉〕

承元四年十月十五日

弓場始で、土御門天皇が出御すると天皇の指示により階下・軒廊東二間・小庭を経て、軾につき上から下へ見下ろした後「召す」といって諸卿を呼ぶ。諸卿が返事をした後退帰する。藏人二人が御射席より帰ると、的を替えるよう指示する。公頼・顕兼とともに能射人を指示され、公頼・顕兼が座にいなかったため、一人上卿（公房か）より指示を受ける。

射ったのち座に帰る。公頼・家衡・知家・定家とともに前方射手をつとめる〔宰相雅行朝

臣〕〔玉葉〕

承元四年十一月二十五日

土御門天皇が讓位すると、宗経・定家・忠行・公氏・通方・家衡・頼平・実氏・清長・伊時・公雅・為長・守通・忠定・雅清・顕俊・信能・家行・知家・経時・宗行・長季・資経・成長・成実・宗房・隆俊・宗雅・親平とともに新院殿上人となる〔御脱履記〕順徳天皇受禪の節会で、璽を持ち筵道を進む〔宮槐記〕節会の後璽を渡す〔承元四年具注曆〕〔踐祚部類抄〕

建暦元年六月二十五日

(一一一一)

順徳天皇の七条院御所御方違行幸で、鈴奏の後名謁を問う。道家曰く「先例では、旅所ではあるいは行わないものだ。ただし、もう夜遅いと、なぜその儀がないのだろうか。暗ければ名謁せねばなるまいと、文治六年の禪閣記（玉葉か）に記されている。後日上皇様よ

建暦元年八月四日

建暦元年十一月二十四日

建暦元年十二月十三日

建暦二年六月九日

(一一一一)

建暦二年六月二十日

りおたずねがあったが、名謁はしてはいけなかったのではないかと、おっしゃったので、私はしてもしなくてもいいでしょうと述べた。最近は行うことが多い。その所見は、玉葉に見えている。だから、名謁を止めるには及ばないだろう。」〔玉葉〕

八条院御法事で行香する〔明月記〕

三条殿行幸に、公房・師経・公宣・忠信・実宣・範朝・有雅・公氏・家良・左近衛少将公俊・通時・定親・左近衛少将為家・親通・右近衛中将通方・清実・右近衛中将雅清・家宣（右少弁か）・右近衛少将家嗣・清親・左近衛少将藪範茂・実時・具親・敦近・実経・親平とともに供奉する〔明月記〕

万機句に、為家・国通・良輔・公継・公房・兼宗・道家・師経・通具・忠房・公宣・有雅・範朝・公氏・顕俊・家兼・宗経・家信・範茂とともに出席する。出御があると、為家・家兼が内侍に付く。定家曰く「上位者として、雅行・宗経・家信・範茂らがいたという。」

〔明月記〕

順徳天皇の大内行幸について「名謁は家礼の人がしてもいいのだろうか。私は、良経様が大将の時、お許しがあるので毎度伺った。雅行は関白家実様が高貴なるとき、これをはばかって私に譲った。どちらも不審なのだが、そのときは私の考えと同じだったでしょうか。」と資家に書状で尋ねると、「伺うべきと思います。良経様のことは基本とすべきです。」と返答をもらう〔明月記〕

復任〔公卿補任〕

建暦二年十一月十三日

大賞会で、四条坊門朱雀付近にて見物中の定家より、行列の引率などについて聞く使者が、何度も自宅にやってくる〔明月記〕

建暦三年一月十三日

従三位〔公卿補任〕

（一一一三）

建暦三年一月十四日

大炊御門公明とともに従三位となる。公明・時通・源具親・基定・実俊・実経とともに官職停止となる〔明月記〕

建暦三年閏九月十六日

上皇の行幸で、鈴奏が始まった頃にやってきて列立する。定家曰く「今夜初めてこの人を見た。」。頼平が御剣を安置すると、定家が揖をして前行する前に早く前行し、閑院南庭に、定家・有能・顕俊・有雅・光親・実宣・忠信・教成・雅親・公宣・忠房・良平・師経・通光とともに浅履を履いて列立し、後ろより座る〔明月記〕

建保二年十二月十四日

（一一一四）

弓場始で、家衡が無名門に入るとやってきて揖をする。隆衡が初矢を射ると、家衡が二番手の準備をし、隆衡が乙矢を射ようとしたとき、雅行が二番手の準備をする。定家曰く「遅い早いに何か考えがあるのか。家衡はふつうである。」。国通が無名門を出ると、射手とともに殿の腋に跪き、西を向く。順徳天皇が入御すると、射手・公卿・殿上人らとともに無名門に入り乱れて群立する。公頼・公長・時賢・光家とともに後方の射手となる〔明月記〕

承久二年十月四日

上皇の御前で胡飲酒の舞を舞う。その後禁裏にて舞う〔催馬楽師傳相承〕〔伏見宮御記録〕

（一一一〇）

承久四年二月二十日

(一二二二)

嘉祿元年五月十九日

(一二二五)

嘉祿二年六月六日

(一二二六)

嘉祿二年六月二十三日

後高倉院の御前にて胡飲酒の舞を舞う〔催馬楽師傳相承〕

妻の高倉院督典侍が没す〔明月記〕高倉院典侍〔尊卑分脈〕

息子の親行が出家する。定家曰く「父雅行卿とともに背き、異常行動をしたとのことを聞いている。あるいは、強盗として父の家に入り、青侍が捕らえて見ると跡継ぎたる親行だったという。または、妹と近親相姦したことにより、ともに父に背くことになったとも言われている。」〔明月記〕

息子の親行と娘を六条朱雀にて斬首する。藤原経光曰く「哀れむべき事だ。」〔民経記〕定家曰く「悪行により父雅行卿が斬ったと人々は言っていた。老後の不吉なること、または狂気であろうか。運命を悲しむべきだ。女は親行の姉妹だという。」〔明月記〕息子の師行とその姉尼を殺害したとして京都より追放される〔皇代暦〕

嘉祿二年六月二十四日

定家曰く「下人たちの言うには、斬首されたのは間違いない、親行と、七条院高倉局の娘松殿基忠の妻という。先年、親行に付き添って夫の家を逃げてきた女という。死体を道ばたにさらして、見物人が市をなしたという。そもそも、許されざる事とは言っても、官位を帯して殿上人である者は、武士の家でもないのに斬首するのは適当ではない。京都で起こったことは、皆々奇妙であると言わべきだ。道行く人を見るに忍びず、樗の木を折って女性器を隠したという。乱れた世の中がなさしめたこの世の恥であろうか。またまた雑人

嘉禄二年六月二十七日

の言うのは、だいたい同じである。出家して白昼門前にて斬った後、遺棄させた。感情を抑えることはなかったという。それぞれ出家の身なりとした。後に聞くに、あの姉は親行と同じく出家し、長楽寺にいた。父雅行は寺僧に言つてつれてこさせ、青侍どもが夜陰に乗じて家の中で斬り殺し、夜更けを見ないうちに遺棄したというのを、隣の下人どもは多く見ていた。ただ、正氣を失ったのだ、とのことである。」〔明月記〕

定家曰く「雑人らの自由なる噂によると、雅行配下の武士が怒る、と言っていた。また、家実様が与えていた所領は停止されるという。本当かどうかは知らない。または、元々与えられた所領はなかったという。後に聞くに、楊梅盛兼卿の説という。本当のことだろうか」〔明月記〕

嘉禄二年六月二十九日

出家したとの噂がある。定家曰く「本当かどうか知らない」〔明月記〕

嘉禄二年七月四日

坊城顕平が「雅行卿の事に關しては、家実様は一切差配なさらず、所領処分はしないとのことです」と、青侍の言説を定家に語る。定家曰く「後に聞くに、嘘であった。所領二カ所は確確實に没収される」〔明月記〕

嘉禄二年七月六日

法勝寺にて、源平両公卿（源通具・定通・雅親・通方・具実・通光・具定・時賢・平經高・範輔・光盛か）が「雅行卿は必ず出家するが、事は穩便ではない。京にいてはいけないとの処分があったという。近衛家御領については、確實に召し上げられる」と語る〔明月記〕
六条知家が「雅行卿は、今月二日になっても俗体のままです。甲斐国の所領は、兄定忠入道の先祖の領土と言っていたいたいたものです。家実様は御領を召し上げて、出仕を停止さ

嘉禄二年七月十一日

嘉祿二年八月

嘉祿二年八月二十八日

嘉祿二年九月一日

嘉禎二年十月八日

曆仁元年一月二十日

(一二三八)

れた。その上はさらなる処分はないというのは、家実様のご意志とのことです」と、定家に手紙のついでに書いて送る。定家曰く「多くの話は同じではない」。和歌一卷を返却したついでに「一昨日、雅行卿が六条入道家衡の所に俗体でやってきました。近衛衛家御領については、召し上げるとのことを内々に報告せよとの指示を、家衡入道は承諾しました」と定家に語る〔明月記〕

追放処分〔公卿補任〕。息子を殺害したことにより、袞宣旨をこうむり、京都より追放される〔尊卑分脈〕

息子と娘を殺害したとして追放される。中宮請印政が終わった後、追放となる〔民経記〕

旧知行地の河内国朝妻庄を藤原頼資の物とする関白奉書が経光に届く。経光曰く「昨日家司の藤原佐清が所望していると頼資様が言われたのだろうか」〔民経記〕

出家〔公卿補任〕

九条教実の息子尊信が出家すると、衛府長・秦兼成・定平・定宗とともに共をする。尊信に小野道風筆の手本が贈られると、賢信よりこれを受け取る「左少将雅行朝臣」(左近衛中将土御門通行・醍醐源氏行職の子か)〔玉葉〕

参考文献

明月記研究会『明月記研究提要』八木書店 二〇〇六年

増補史料大成刊行会編『増補史料大成 山槐記第二卷・第三卷』臨川書店 一九七五年

『大日本古記録 猪熊閑白記』岩波書店 第一卷（一九七二年） 第二卷（一九七四年） 第三卷（一九七七年） 第四卷（一九八〇年）

稲村榮一『訓読明月記 第一卷・第四卷・第七卷』松江今井書店 二〇〇二年

久保田淳校注『千載和歌集』岩波書店 二〇〇七年

橋本政宣編『公家事典』吉川弘文館 二〇一〇年

国書刊行会『玉葉 第一・第三卷』名著刊行会 一九七一年

『冷泉家時雨亭叢書 翻刻明月記』朝日新聞社 別卷二・第一卷（二〇一二年） 別卷三・第二卷（二〇一四年）

参考HP

東京大学史料編纂所ホームページ <http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>